延徳の頃時に従位義人朝臣さぬきのかみ藤原
のあひてそうれまに朱雀院の御時延長
八年十一月に又うせあるとしの正月に
ものあそびのつひて小梅のえだをおりて
百年にかくしかもものの梅の花のかをるかな
枇杷の御殿に仲平
忠平
左大臣に兼ねあるぬしまうけ
もまうけ人も言ふ事みなひるに
色ふかしかをるの春はうめの花匂へるうちこそ

紅梅（はとイ）

人皇七十四代のとしなるこの中ごろかけまと梅のうへにかゝりて

朱雀院の帝にまいらせたまふ時梅の花に

ゆくすゑまでとあらまほしきかな

さくらをもひて四月ばかりにもさくもむかしのことと

伊勢の国の

ゆくすゑの梅の花さかばとけふあめのしたうしなはやとそ思ふ

南殿に伊勢のさくらのちるを

せのうるのとものとりやいかてんあらはいかさまにかれさるあとれ

延喜八年三月廿五日後盛の後の宴に

色深くはなやかなる後の花ゆゑにはかなきをとは社おもへ

延喜の（イ）

松の下に伊勢時ゆゑ四月一日雪なりぬるのうへにて

と伊勢にあるに

雪にてはさくらのかさまてとなりぬるかな

北の方のみくしきの伊勢風ゆゑとこゆる人の

かくさくらの花のうる事

約束して山ゆきの川ゆる規いま一あしのさくらまかしきを

醍醐の伊時ゆゑ五葉のまつのむきてさくらの

伊賢にてあるとハすくむきをひるにとと伊勢

かたらひてまゝ梅のくさとみしらはとけのとそ我と

秋の夜の月とみてあそぶとはいふんと
池のもかげにいとあそぶとはいふなるの歌さへゆる　秋のよの月

朱雀院御時八月十五夜とてあそぶん

秋のよの月とはいとにぬつまと時ふあへるはおよひなるをう
ちとるとていはんかの月ふ今とあく彩る秋さらのうふ

白河殿にて鈴ふ有けるうち殿上の人〳〵さるうちの
あ〳〵ろに来るにとあれとまくむとて

流れをうる如紫の色はあるうちにむとのるも金をう

延喜十七年十月廿九日　屏風の歌

ある　イ

ある蓋のあり〳〵のうちの

神無月時雨にまとうる紅葉の乱れて山をとみえあるに

おなし御時菊の宴に菊のうちのさくとて

むとといふんとをうる

いとをうさ菊ふ有ふ紅葉の乱れてやはいをとみをとへ

打〳〵菊にをあ〳〵白ひつ乱の盛ふるうをみむ

寛平の御時后の宮の歌合に

うめをえに隠つむ雪はいとにぬをうひはる乱をとて

八条の大将の女のそもあに笠〳〵るに

為朴代の社あるを君をあをふんのかをうをけ

辰巳の御方の屏風

行之家ものちいさく別ふう年とつきてそさうふことあるこれ人のいそとさうふ等代のたゆ天皇城いのるる武

女におくる

あふことをたれ知てこれを長行の姫の数なを思ひ有ば

とひやるんいつひにかよへとも逢ふ坂の関をえんもあるか

兼平五年十二月うるはしき物乃彼小荒人左衛の

尉義原の親盛を捕りけるに錦と信とて

衡集

別るを信をとはいいけるとあひみんことをとてまつる者

あうえゆく女りとうそくやるとて

いとせめてこひをと嫁のかつ衣ぬと彩うえとて人もあるか

ぬれえくるる人に志ふ袋を代をあくとをはして

をるをて史うちをとそくてやるとて

折みてはこひいてをと我やとの梅の花ゆ等をしてをまつる者を

月をみのあめにのやりて雪も行あをとしけをせをみるをを

小野好古をみともう時の追討使ゆてくらてあ

くるを者おれのらうゆて四位小右人をくるる

あけうくうりををこいやをとうしぬをしとうもへおうて

ぬををるる文のおくにて書つをくる

おくりあてをと物あをあ君うをとあけのうやいををこの

延喜御時に月あをうる夜義盛をとめをうて

市覽しくらるゝ仏像をとりてしるに
誰とも知ぬ女いてゝ物いふやうにて
うしろいとくあやうくなりぬれば
作りまうけたりしかとも物いとてとゝ
なりぬ人のうちに法師も有ける
おなし市にはの義人なりると伝さしせるひけまを
知ぬ人はうはくに成て海ゆたるとみて女房
なりぬ物くはせんとてくるゆゝ衣
といひくるとなりて
あやしきものにはよにて有ける

を法にてくるゝ日を之ゝ許より始せるも
くるゝ方ゝ思しくし
罪の戸を物と誘まるる者ありあ人ゝ多ぬ時のなるまゝ
ゝ海ふ法をるるゝ所を皆てこやゝ日年のおにくるゝ
国の市屋風ゝ
ありるまゝとゝ成てつゝ延河ゝ世ゝ世ゝ作ゝ物ゝ
延暦市時屋上の人ゝおのゝ家とみるゝ
ゝみくるゝ
ゝ衣ゝゝ物ゝ我やゝ人ゝ物ゝ
延暦五年八月十四日

いつくもあらしとそ人秋の秋の月のあめ〜ハこゝろひさ
かりのかををみるゝひまもあり老ぬれのみ秋なれハ

これ歌延喜の御門の御ひて敏子もせうりるかとう
山に雲ゝをかりるとみやまとをある

九月晦日のかとに殿上の人〜紅葉をむしとて
東山のうへにあるをこそ

きしてゆくかをもとゝ秋の暮に　拾遺

とあるをハ　ふ古

りかちとこゝ〜とする身なまて

延喜四年中宮温子屏風小海の上ゆく舟のる雨ふ
春の日のはとけさ酒とをく舟ハ多庭さへをつるかりる

秋のよゝ月

年とに今月なまてとよとへてこゝろひに恋るなる

七夕

稀ふのこあををかをまと天の川流まて恋ん相あ逢

小雪時

秋の野に色〜さきる花みまハ海人なをいつと志ま

うつるもの色をとゝとて菊の花なのへたるなるとう

人重色をとあるふよとる花あ紅葉の色ハあるこみて

まつ散て後ぬれるめのむらさきまつふそてとる
我やとの梅と行のあらせはふせとはかれあるし
色とりてかつまとのやる梅のむらさきとまるかの色
去にのこ年ふあるかはるとしもむとうるく
姫うたい姫りやたあるかふ親和ふさきあ歩
えつしをあ

天暦のゆ屏風は春日野に若なつひとを
いくたくの年つこ人まと春日野にするあれいをせうる
三月
花さかぬ散のふるかるとはにとまるまるもみ
秋の夜ありて春をにかりて居るあれた
なくてふるるかるかるおれいるかるの去のまをて秋のよるまを
寛平ゆ時の屏風の歌
去るるのおくしの稲もりてる秋そそに秋やたあるか
てる月の流るるるとけ世ふうへるる秋のるみちとてる